

今、この人に Interview

タッサニーヤー サェリーさん (通称「グンさん」)

タイのチェンマイを拠点に製作されたほとんど天然染め、手織りの服をあつかう「うさとジャパン」に勤務



お互いの国を認め合うために、「知りたい」と言う思いを持って多文化を受け入れていく社会になって欲しいですね。

■日本で留学後、タイでお仕事をされ、再来日されたきっかけは？

日本の大学では日本語や日本の文化を勉強しました。卒業後はタイに戻って、できれば日本語を生かした仕事をしたいと思い、JICA (国際協力機構) に入り、国際機関のスタッフとなりました。JICA タイ研修プロジェクトがきっかけで、甲良町国際交流企画員として2008年に来日し、2年間、地域や学校でタイの紹介やタイ舞踊教室、外国料理教室などを通じて国際理解、国際交流、多文化共生のための活動をしていました。

■国際交流企画員として難しかったことは何ですか？

甲良町は人はやさしく、好きでしたね。自分で企画して発信することが多かったのですが、仕事は楽しかったです。難しかったというか、私は日本が好きで日本のことは勉強していましたが、逆にタイのことは知らないことが多いことに気づかされました。日本に来てからは自分の国のことをより深く勉強して知るようになり、自分の国の良さも知るようになりました。タイにいたら勉強しようとも思わなかったし、タイの良さも分からなかったでしょう。ありがたいと思いました。

■学生で日本に留学した時と、社会人として来日した時の日本の印象の違いは？

学生で留学していた頃は多文化の人が回りに多く、甲良町に来て初めて回りが日本人ばかりで日本の文化や生活に触れることになりました。日本では一つのことを決めるのにみんなに連絡して、段階を踏まないと進みません。調整が多いんです。「もっとそのことはディスカッションしてから進めてください」と言われます。日本人の性格だと思うのですが、それは良いところでもあり、悪いところでもありますね。日本社会での「空気を読む」というのは「みんなと合わせなさい」ということなんですね。私も今は空気

を読むようになって来ました(笑)。

■日本に来て「ともだち」をつくるのが難しかったということですが？

たぶん「ともだち」の意味がタイとは違って、タイでは今、出会ったばかりの人でも家の中に入れる関係になります。日本はまだ「知り合い」のレベルなんですね。「ともだち」はレベルが高いんです。「ともだち」と「知り合い」が違うことは今は分かりましたが、初めはお友達と思っている方の家に行っても玄関までで、なかなか家の中まで上げてもらえないことに悩みました。

■2010年にタイの織物を取り扱う会社にお勤めになりましたね。

タイの田舎に関わりたいたいという思いがありました。今の仕事はラオス等のタイの郊外に縫製の仕事をしていますので、とても良かったと思っています。仕事とは別に、地域で国際理解、多文化共生のための活動を「多文化サークル」で企画をしています。

■「多文化サークル」ではどんな活動をしているのですか？

甲良町国際交流企画員としての経験を生かして活動を続けたいと思い、2010年に地元の方と一緒に任意団体ですが、「多文化サークル」を立ち上げました。タイ料理教室やタイ舞踊、瞑想会ですね。サークルのメンバーは、ほとんど日本人で、みんな信頼できる友達で、私にとって安らげる場所です。サークルでの集まりは受発信の場所であり、悩みを言い合える場所です。タイ人だけのコミュニティの場所ではなく、いろんな国の人が混じって関わって、「国」という枠を外して「人」として「個」として付き合っていく場所なんです。

■多文化を受け入れるにはどうしたらいいのでしょうか。

タイには「マイペンライ」という文化があります。例えば失敗した時に、

● プロフィール ●

タイ出身、バンコクで育つ。子どもの頃に見た「ドラえもん」がきっかけで、日本に興味を持ち、大学(文学部日本語学科)を卒業後、来日し、さらに日本語を学ぶ。帰国後は、JICAで5年間勤務。2008年に甲良町国際交流企画員として再来日し、地域や学校で、タイの紹介、タイ舞踊教室や外国料理教室などを通じて国際理解、国際交流、多文化共生のための活動をする。2010年には任意団体「多文化サークル」を立ち上げる。現在、京都市にあるタイの手織りを扱う会社に勤務。彦根市在住。

「気にしないで！大丈夫だよ！」は相手を和ませるためにありますが、日本社会では受け取り方が難しいですね。互いにその国のアイデンティティーがあるので、それぞれの国を尊重し合うことが大事だと思います。「知りたい」と言う思いを持って多文化を受け入れて欲しいですね。外国人が話しやすい場所や楽しくなる場所を作ってほしいですね。それが「多文化サークル」の思いなんです。「行きたい場所」があって「知る」きっかけになるんだと思います。

■今後の夢は？

国際理解をすすめるには、衣食住といった身近な暮らしにアクセスすることだと思っています。そういう意味では、今行っているような外国料理教室は、日本人にも興味を持ってもらえるので、その国の料理と合わせて国の暮らしの様子もお話することで国を知ってもらえます。服や言葉もその一つのツールですね。やはり、国をわかりやすく知っていただくには、暮らしに溶け込むようなツールが、とても大事だと思っています。

将来的にはタイでの生活を拠点にしながら、タイと日本を行き来して、お互いのことを知ってもらえるような活動をしていきたいです。そのことで、今の多文化サークルのような活動が、いろんな人たちによっていろんな場所で行われていくことになれば素敵ですよ。